

国語

内容理解

語句

文法

文脈把握

1 次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

卵を割りながら、Aこう考えた。

と書くと、何やら夏目漱石大先生の「草枕」Bみたいで気がひけるが、生まれてから今までに、私は一体何個の卵を食べたのだろうと考えたのだ。

一週間に四個として一年で約二百個。十年で二千個。とすると、私はかれこれ一万个に近い卵を食べた勘定になる。いま、東京では卵一個が二十円ちょっとだから金額にするとおよそ二十万円。それにしても一万个の卵とは、考えただけでそれら恐ろしい。知人が、

菜の花や百万人のいり卵

という迷句を作ったことがあるが、まさに一万人のいり卵である。

子供のころから、B卵には随分とお世話になっている。

体が弱いくせに白粥が嫌いだったから、重湯からおまじりになり卵のおじやが許されるCとひどくうれしかった。氷が溶けて、プカンプカンと音のする生あつたかい水枕に耳をおつつけながら、祖母に卵のおじやを食べさせてもらおう。

起きれば起きられるのだが、私は満二歳にもならないのに弟が生まれて、母のおっぱいを奪われてしまった。夜泣きする私に、母は乳首にとがらしを塗ってしゃぶらせ、あきらめさせたという。そんなことも手伝って、C。

アーンと口を開くと、祖母は、散蓮華で、白身の固まりをよけ、黄身の多そうなところをすくって、フウフウと吹いては口に運んでくれた。祖母はお線香と刻みたばこの匂いがした。

卵焼といり卵は、しばしば登場するお弁当のおかずだった。最近Dは、児童のお弁当のおかずには、黄、赤、緑の三色が揃っていないと、保護者は先生から注意を受けるらしいが、昔は、卵焼にたくわんという黄一色でも、先生は何もいわなかった。卵焼は上等の部類で、梅干に昆布のつくだ煮とか、足で踏んだのではないかと思うほど御飯をつめ込み、その上にめざしが一匹、寝転がっている、などというお弁当を持っている子もいた。忘れたといって、毎日、お昼になると運動場でボール遊びをしている子もあった。

貧しいおかずの子や、あれは梅干の酸でそうなったのだろう、弁当箱のふたに穴の

あいている子は、かくして食べていた。机のふたを立てたり、包んできた新聞紙をまわりに立てたり、食べる時だけ、弁当箱のふたをずらしたり、かくし方もさまざまだった。先生は何もいわなかった。生徒の辛い気持がわかっていたのかもしれない。

父の仕事の関係で、小学校だけでも四回転校しているので、名前も忘れてしまったのだが、お弁当のおかずが三百六十五日、卵という女の子がいた。彼女はみんなにタマゴと呼ばれていた。

タマゴは、日本舞踊を習っていた。子供なのに身のこなしに特有の「しな」があり、セーラー服がまるで和服を着ているように見えた。教壇で採点している男の先生にぶら下がるようにして甘え、手首から先だけをしなわせて、

「ちよいと…」

という感じで先生の肩をぶつた。

堅いうちに育った私には、まぶしい眺めだった。

学芸会ではタマゴは「藤娘」を踊った。私は、ゆで卵が着物を着て踊っているような気がして仕方がなかった。

子供のけんかというものは、今になって考えればまったく他愛のないことだが、そのころは真剣だった。私は、告げ口をしたという理由で、Bという女の子と口をきかなくなつた時期がある。Bの声は美しいソプラノで、学芸会ではいつも一番前で独唱した。私は、後ろでコーラスをしながら、Bのセーラー服の衿ばかりを見ていた。

口をきかなくなつてから遠足があった。お弁当を広げている私のところにBがきて、立ったままゆで卵をひとつ突き出している。押し返そうとしたが放り出すようにして行ってしまった。返しにゆこうとして手にとると、卵がうす汚れている。よくみたら卵のカラに鉛筆で、

「あたしはいわない」

と書いてあった。

(注1) 散蓮華＝中華料理で用いる陶製のスプーン。

(注2) しな＝しなやかでなまめかしいふるまい。

(向田邦子「父の詫び状」による)

(1) 文章中に「こう考えた」とあるが、筆者はどのようなことを考えたのか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 自分と夏目漱石とを比較するとは、おそれおおくおこがましいこと。

イ 卵に費やしてきた金額が二十万円にも達することがそれら恐ろしいこと。

ウ いままでに一人分のいり卵を作り、それらを一人で食べ切ったこと。

エ これまでの人生で知らぬ間に、非常にたくさん卵を食べてきたこと。

(2) 文章中に「卵には随分とお世話になっている」とあるが、筆者の卵に関する思いつきとしてふさわしくないものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 体調が悪いとき、祖母に食べさせてもらう卵のおじやが大好きだった。

イ 大好物だった卵焼は、毎日欠かさず、お弁当のおかずにしてもらった。

ウ 名前は忘れたものの、タマゴというあだ名の同級生がいたことを覚えている。

エ ゆで卵一つのやりとりから、ある遠足のこと深く印象に残っている。

(3) 文章中の「C」に入ることばとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 自立を求めたのだろう

イ 甘えたかったのだろう

ウ くれたかったのだろう

エ 母親を恨んだのだろう

(4) 文章中の「最近」が直接修飾している文節を……線部ア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

(5) 文章中に「先生は何もいわなかった」とあるが、その理由について筆者はどのように考えているか。それを説明した次の文の「」に入ることばを、文章中から十五字以内で探し、はじめと終わりの三字を抜き出して書け。

当時はお弁当について細かく言われる時代でなく、また、当時の社会の状況からして見ればえのよいお弁当をもつてくることはむしろかしく、ため、先生は何もいわなかったのだと筆者は考えている。

(6) 文章中に「まぶしい眺めだった」とあるが、なぜそのように感じたのか。その理由として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 家計が苦しい自分には、日本舞踊を習うことができるタマゴがうらやましかったから。

イ タマゴの身のこなしには特有の「しな」があり、上品な輝きに満ちあふれていたから。

ウ 男の先生に甘えるタマゴの様子は、自分にはとてもまねできないものだったから。

エ 採点している先生に取り入るタマゴのように、自分も成績をよくしてもらいたかったから。

(7) 文章中の「他愛のない」の用法として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 息子の他愛のない言い分も、父は真剣に聞いてやった。

イ 二国間交渉には、他愛のない友好の精神が満ちていた。

ウ 幼い子供は、自己中心的、つまり、他愛のないものだ。

エ 他愛のない真剣な創作態度が、その絵の感動の源泉だ。

(8) 文章中に「卵のカラに鉛筆で、「あたしはいわない」と書いてあった」とあるが、ここから「B」のどのような気持ちがかげえるか。「私の誤解を解いて」に続くように十字以上、十五字以内（句読点も字数に数える）で書け。

文脈把握・内容理解・語句・文法

2 次の文章を読み、あとの(1)～(7)の問いに答えよ。

先年、あるところで、「うそも方便」ということばについてどう思うか、という調査をした。調査に当たった人たちの予想では、たぶん、若い世代は、たとえ方便にしてもウソなどつくのはよくない、と考える人が多いであろう。それに対して年配の人は、人生の経験もあって、ときにウソをつく必要もあるのを認める人が少なくないに違いない、という見当をつけた。(A)

ところが、結果はこの予想をまったくくつがえした逆のものであった。若い人、ことに二十歳前後の人たちが男女共に最も多く、七〇パーセント前後の人が「うそも方便」を「A」した。そして年齢が高くなるにつれて、この数が減っていった。六十歳

を越える年齢層では、その半分くらいしか認めない。つまり、本当のことを [B]、と答えたのである。年配者の方が道徳的に [C] の答えをし、若い人たちが現実的な [D] を答えたのかもしれないが、別の考え方もできる。(イ)

本当のことを言わなくてはならない。ウソが人に迷惑をかけたか、問題を起こすような場合には、そのとおりである。しかし、「うそも方便」というときのウソは、そういう重大な不都合を生じるようなものではない、という含みがある。医者が患者に病名を告げる。「××ですよ。治る見込みは、まずないでしょう。」仮に、これが科学者としての良心が言わせることばであっても、言われた患者はどんなショックを受けられるかもしれない。そこで、医者は「△△ですね。すこし長くかかるかもしれませんが、頑張ってください。」というようにやわらげる。「××」を「△△」と言うのは明らかに正しくない。しかし、[F] のが医療ならば、このウソは許される。

アメリカあたりでは、そういう治療を認めないようで、多くは病名をありのまま直接的に言う。アメリカの患者はそれに耐える強さをもっているのであろう、と想像していたが、先ごろのアメリカの医学界雑誌の報じるところによると、不治の病を告知された患者は、その日から急速に症状が悪化する場合が少なくないのに対し、告知を受けていない患者の進行ははるかに緩慢だ、という。やはり、病人にとつて、「方便のうそ」はありがたいのである。心身に打撃を与える真実より、勇気を失わせないウソの方が道徳的である。

「うそも方便」はよろしい、と答えた七〇パーセントの若い人たちが、そこまで考えているのかどうかは分からない。けれども、いまの若い人がことばについてデリケートな感受性をもっている、という見方はできる。このごろの若い者のことばはどうか、とまゆをひそめる年配者の方が、むしろことばについて神経が粗雑なのかもしれない。(ウ) それに対し、いまの若い人がことばについてデリケートなのは、一つには若い人たちの育った時代が、戦中戦後の荒々しい時代に比べて穏やかになったということがある。また、教育の普及ということもことばへの感受性を高める。教育とは、要することばによる知的洗練である。テレビ、ラジオ、電話などを通して、話しことばに接することも多くなっている。そういう時代に育った若い人は、それだけことばに傷つきやすくなっている。したがって、人に不快を与えまいとする。(エ) そのためだったら、「うそも方便」はむしろ当然となるのである。

若い人たちが話しているのを聞くと、いかにも乱暴な口をきいているようでありながら、その実、相手の触れてほしくないところは、巧みに避けている。マジなことは相手の痛いところを刺激するおそれがあるから、あたりさわりのない話に花を咲かせている。注意して聞いていると、案外、心優しい話者なのである。

相手の逃げ場をなくするようなことがあってはいけない。だから、真実のままはっきりと言うのではなく、わざとあいまいな言い方をする。白黒がはっきりしているのは興ざめる。(注1) ファジーな言い方がおもしろい。若い人もそう言うのである。

(外山滋比古「ことばと人間関係」より)

(注1) ファジー＝あいまいな。

- (1) 文章中には、次の [] 内の一文が抜けている。この一文はどこに入れるのが最も適当か。文章中の〈ア〉〈エ〉のうちから一つ選び、その記号を書け。

ひとこと多いのは中年以上に目立つ。

- (2) 文章中の [A]・[B]・[C]・[D] に入ることばの組み合わせとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア A 肯定、B 言わなくてはいけない、C 建前、D 本音

イ A 否定、B 言ってはいけない、C 建前、D 本音

ウ A 肯定、B 言ってはいけない、C 本音、D 建前

エ A 否定、B 言わなくてはいけない、C 本音、D 建前

- (3) 文章中の [E] 別の考え方とは、どういう考え方か。次の文の [] に入ることばを、文章中から二十九字で探し、はじめと終わりの三字を抜き出して書け。

[] という考え方。

- (4) 文章中の [F] に入ることばとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 病気を治療するのではなく、病人を治療する

イ 病人を治療するのではなく、病気を治療する

ウ 病名を正確に伝えるのではなく、病人の心理を理解する

エ 病人の心理を理解するのではなく、病名を正確に伝える

- (5) 文章中に [G] 病人にとつて、「方便のうそ」はありがたい とあるが、なぜか。「勇気」ということばを用いて、十字以上、十五字以内(句読点も字数に数える)で書け。

(6) 文章中の「粗雑な」とは異なる品詞のものを、~~~~線部ア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

(7) この文章の内容として最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 「うそも方便」という日本的な慣習は、国際化時代には克服されるべき課題だ。

イ 心身がひ弱であるために、若い人がなにごとにもデリケートになってしまった。

ウ わざとあいまいな言い方をするのが、むしろ望ましい場合が少なからずある。

エ 豊かな感受性を育むために、さらにことばを洗練する教育を普及させる必要がある。

3

次の文章を読み、あとの(1)〜(5)の問いに答えよ。

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき薬として、朝ごとに二つづつ焼きて食ひける事。年久しくなりぬ。ある時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ来たりて、かこみ攻めけるに、館の内に兵二人いで来て、命を惜しまず戦ひて、皆追ひ返してげり。いと不思議に覚えて、「日ごろここにもものしたまふとも見ぬ人々の、かく戦ひしたまふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年来たのみて、朝な朝な召しつる[D]らにさふらふ」といひて失せにけり。

深く信をいたしぬればかかる徳もありけるにこそ。

(兼好法師「徒然草」より)

(注1) 筑紫は現在の福岡県あたり。

(注2) 押領使は地方の反乱鎮圧凶賊追討のために常時おかれた官。

(注3) 土大根はだいこん。

(注4) いみじきはよく効く。

(注5) ものしたまふは住んでいらっしやる。

(注6) 年来は長年。

(注7) 徳は神仏から与えられるご利益。

(1) 文章中の「いふやうなる」を現代かなづかいの表記に直して、すべてひらがなで書け。

(2) 文章中の「食ひける」と動作主が同じであるものを~~~~線部ア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

(3) 文章中の「年久しくなりぬ」を現代語訳に言い換えたものとして最も適当なもの次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 長い年月が経過した

イ 歴史的偉業となった

ウ 老齢となってしまった

エ 年齢にふさわしくなった

(4) 文章中の[D]に入ることばを、文章中から三字で抜き出して書け。

(5) この文章の教訓として最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 神仏は、だいこんがいかに健康によいかをご存知だ。

イ 優れた兵士は、少数でこそ大人数の敵を撃退できる。

ウ 意味のない習慣であっても、継続することが重要だ。

エ 信心が深ければ、それに応じて神仏のめぐみがある。